甲状腺外科草子 149

古文復習：金槐和歌集の実朝（前）

杉野　圭三

源実朝の印象は「京文化に憧れ、和歌や蹴鞠に秀で、暗殺された鎌倉幕府三代目将軍」であろう。

古典Ⅰ（昭和 42 年）

金槐和歌集（昭和 54 年）

源実朝（1192－1219）

中学時代の古文教科書に実朝の歌が載っていた。

箱根路をわれ越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ（593）

大海の磯もとどろに寄する波われてくだけて裂けて散るかも（696）

これらの実朝の歌は古文授業では取り上げられず、書き込みなどの勉強した形跡は全くみられなかった。古文の先生も興味がなかったらしい。

最近、実朝に興味を持ち調べると和歌に関して、古来多くの人から高く評価されてきたのを知った。

実朝は 14 歳の時から和歌を作ったと伝わる。古今集、新古今集、万葉集を愛読し、18 歳の時に藤原定家の教えを受け、作歌法の大要を述べた「詠歌口伝一巻」を贈られた。

藤原定家

賀茂真淵

正岡子規

藤原定家によって書かれたと伝えられる歌論書「**愚秘抄**」に、「鎌倉右府はたけたる歌人と覚え侍る。古人の詠作にまじへたりともすべて劣るべからず、実にたぐひ無事とぞ思ひ侍る」とある。

賀茂真淵も実朝を「鎌倉の大まうち君の歌は、今の京この方の一人なり。此大まうち君のよみで給へる歌こそ、奥山の谷の岩垣ふみはららかしいでて、大空にかける竜の如くいきほひありて、おほのらや草木ももろむけ、八重たつ雲霧を払ふ風の如くひたぶるにして、いかくをゝしくみやびたるいにしへの姿に返りたまへりけれ」と称える。

正岡子規は古今和歌集に批判的で、内容が面白くなく理屈っぽく優美すぎるとし、万葉集の力強さに及ばないとした。その辛口評論家の子規は実朝をベタボメしている。「実朝は和歌に於いて不朽の業を為すを得たり。政治家として如何に実朝を貶するとも、歌人として萬葉以後只一人たるの名誉は終に之を没すべからず。将軍実朝は一事を為さずして、廿八歳の歌人は能く成功せり」

古人の高い評価を考慮し**金槐和歌集**を手に入れようとしたが現在出版されているものが殆どないことが判明した。頼みの岩波文庫版（斎藤茂吉校訂）も絶版であり、やむなく古本で 1979 年発行の第 37 版を入手した。歌数は 719 首（重複を除外すると 716 首）、その中の何首かを並べてみよう。

今朝みれば山も霞みて久方の天の原より春は来にけり（1）

若菜つむ衣手ぬれてかた岡のあしたの原に淡雪ぞふる（17）

散りぬればとふ人もなし故郷は花をむかしの主なりかり（89）

初瀬山けふもかぎりとながめつつ入相の鐘に秋ぞ暮れぬる（311）

烏羽玉のいもが黒髪うちなびき冬ふかき夜に霜ぞおきける（330）

天の原風にうきたる浮雲の行へさだめぬ恋もするかな（432）

思ひきやありしむかしの月影を今は雲ゐのよそに見むとは（497）

雪ふりて跡ははかなく絶えぬとも越の山みちやまず通はむ（586）

いやはや、勉強不足を恥じ入るばかりです！

参考資料：Wikipedia,など

（　一甲状腺外科医の徒然なる随想　）

2025 年 8 月 21 日